

1 日前プロジェクト



電気がない生活に悪戦苦闘 ～懐中電灯から携帯電話に充電を～

(仙台市泉区 10代 女性 学生)

高校を卒業して大学入学前の春休み期間中に震災が起こりました。

その日は母と家において、揺れがおさまるまで家の中でうずくまっています。茶の間のテレビがテレビ台から落ちたり、戸棚の中のもの落ちてきたりしました。



石油ストーブがありました。余震が怖かったので母と2人で自宅前に停めてある車の中で暖房をつけて過ごしました。

母の携帯電話がメールは受信しても返信ができなくなってしまったので、家族へのメールを自分の携帯電話からしていました。携帯電話の充電がどんどん減っていくので、中学時代に授業で作った手回し充電の懐中電灯に携帯電話の充電ケーブルが付いていたので、それで充電していました。

震災の影響で大学の入学式が中止になりました。しばらくの間、家の電話やネット回線も止まっていたため、大学の入学式が中止になったという情報を得るのに苦労しました。

普段から電気に頼った生活をしてきたことに改めて気づかされました。

もし地震の前に戻れるのなら、電気がなくとも家族や大切な友人たちと連絡をとりあえる手段をきっちりと話しておくべきだと思いました。

やっぱりやっておけば良かったな ～転倒防止した家具だけは倒れず～

(東松島市 60代 女性)

地震でびっくりして飛び起きて、とにかくケガをさせないようにしなきゃと思い、孫を抱きかかえて、わきによけたすぐ後に天井の蛍光灯が落ちてきたの。まさに間一髪。

で、寝室から居間のほうに行こうと思って、ドアをあけようとしたら開かなくて、何で開かないのかと思って、それこそ思いっきり押したら、台所のものが全部倒れていて、それで開かなかったんです。

やっとその上をこえて居間に行ったら、2段重ねの和ダンスの上だけ、2段目がテーブルを越えて、2mぐらい吹っ飛んでいました。もうテレビは倒れる、人形ケースは割れる、本棚は倒れるで、足の踏み場もないほどでした。

転倒防止器具をつけていた家具だけは倒れなかったので、やっぱり全部にやっておけば良かったなと思いました。



実際の災害で被害にあった方たちの体験談をお聞きし、私たちに今何ができるか考える

自宅も職場も普段の備えが必要だと実感

(仙台市泉区 30代 女性 会社員)

平日の日中に発生したため、職場や家にいる家族との連絡がなかなかつかず不安な気持ちになったのが一番最初に思ったことでした。

電車などの交通機関がすべて機能しない状態で、当日は家に帰ることができず余震の続くなか職場で一晩を過ごしました。

電気・ガス・水道すべてストップした状態で、電話も混線状態のなか情報を得るためにラジオをつけましたが、普段使用しない単2電池の予備がなくていつ切れるか不安でした。



今後のことを考えて、緊急時に使用する電気製品は比較的買い置きが多い単3電池を使用できるものを選ぶか、普段使わないタイプの電池でも買い置きをしておくべきだと思いました。

普段から飲み水はまとめて購入していたものの、今回のように長期的に水道が使用できなくなると非常に困るので、下水に利用できる水をためておくことも必要だと痛感しました。お風呂の水もすぐに捨てないで残しておいたり、余震で停電があったときも、まずは水が出るうちにためることを優先するようになりました。

震災後、ガソリンの入手に困ったこともあり、最近はガソリンが残り半分になるとすぐに給油するようにしています。

今回の震災を経験して一番思うことは、備えておいて困ることはないということです。普段、疎かにしがちなことですが、いざというときに本当に困るのは自分です。自宅だけではなく、職場にもある程度の備えが必要だとも感じました。

水が使えず、お皿にラップ

(石巻市 70代 男性)

私のうちは地震後92時間、3日半ぐらい水が出なかったのね。トイレはすぐ近くの病院ですませました。病院は自家発電で大丈夫だったから。

水がなくて一番困るのは、何でも洗うことができないということなんです。で、アウトドアでやったのを思い出して、ご飯を食べるときもコーヒーを飲むときもラップを敷いて使いました。

友達が多いものだから、食べる物がなだらうからって、豚の角煮だのいろいろと持ってきてくれるのです。ああいうのって油っぽいや、洗うのは大変です。でも、ラップを敷くやり方だと、汚れたらラップさえ取り替えればいいわけです。水が出るまでの間、ずっとそうやっていました。



屋根に避難し九死に一生 甘かった想定

気仙沼市 40代 男性 漁協職員

地震のときは、会社にいました。自宅が川沿いにあったので家族のことが心配で、4キロの道を自転車で走り自宅に戻りました。既に家族は避難した後で、家にはだれもいませんでした。そうこうしているうちに津波、火事と大変なことになり、ベランダから屋根へと避難しました。屋根の上から見える光景は、人が乗ったまま流される車や、家が激流のみ込まれて流されるという信じ難いものでした。かといって助けることもできずに、ただただ見過ごすことしかできませんでした。今でも胸がつぶれそうになりますし、半年間は夢でうなされました。



インタビュー日：2012年9月22日

ここももう危険だと思い、ちょうどその場にいた4人と助け合いながら、ふだんなら歩いて15分ぐらいのところを1時間かけて中学校に避難しました。3日目に家族の安否は確認できました。震災2日前にたまたま津波が来たら2階に逃げようと話合いをしたばかりでしたが、今回の地震はそんな避難では駄目なことがわかりました。

「想定外」を考えて、日ごろから家族と話し合い、避難場所をきっちと決めておくことです。そして、迷わずにその避難場所を目指すことです。まずは自分自身の身を守ることです。

thh25055

被災地では携帯電話は繋がらず ～他の連絡手段を決めておこう～

(仙台市太白区 30代 女性 会社員)

震災当日はちょうど外に出ていて仕事をしていました。

地震が起こり、立ってられないほどの揺れに地面に倒れてしまいました。その後、家族と連絡を取る事すらできず、どこで何をしているのかと心配しましたが、携帯電話を命綱として使用している現代人は、何かが起こった時に脆いものだと知りました。



私の会社のある場所では、使用している携帯電話は繋がったのですが家族のいる場所では全く繋がらず、連絡がつかない状況でした。

緊急時の連絡先を家族で話し合っておけば、もっと早くに安心できたかもしれません。真っ暗闇の中を車で走りながら、そんな事を思ったのを覚えています。

いざというときの、携帯電話以外での安否確認は家族内で絶対に決めておくべきだと痛感しました。

この他にもたくさんの体験談が掲載されています。ご覧いただきご自身に置き換えて、今なにができるか?「考えるきっかけ」としてください。

親のしつけに感謝～我が家の防災教育はとてもシンプル～

(高古市 60代 女性 元校長)

私たち6人姉弟は、地震が起こるといつも、「地震だ、逃げろ!それー」って、ランドセルを背負って近くの山に逃げました。ランドセルが空っぽだからと教科書をどりに行こうとすると、「絶対に戻るな!」と言われました。



夜は公民館へ逃げました。真っ暗でも着られるように服をたたんで順に枕元に置いて寝ること、すぐに外へ出られるように玄関の靴を揃えておくことが我が家の決まりでした。

東日本大震災の日も、迷わず逃げることを選びました。地震が起きたのは5時間目の授業中。校舎がメキメキと揺れる中、生徒を集め、一枚ジャケットを羽おろせ、中学生には小学生を手伝わせて避難しました。

私の両親は昭和三陸津波で家族を失っています。それだけに、子どもたちに津波の恐ろしさを徹底して教えてくれたのだと思います。とてもシンプルながら分かりやすい防災教育でした。

thh26003

災害対策ゼロの自分に気づかされる

(仙台市青葉区 40代 男性 会社役員)

事務所でデスクワーク中、「地震だなー」と軽く思った次の瞬間にはこれまで体感したことのない信じられない揺れに・・・。



ピルが古いこともあり、本棚を始め、ありとあらゆるものが倒れるなか、必死で目の前の倒れそうなものを手で押えてました。とっさの出来事に机の下に身を隠すなど冷静な判断もできませんでした。

独り身で、両親は県外なので、まず心配したのは自宅マンションに居る愛犬のこと。マンションまでは徒歩圏なので、急いでマンションに戻り、啞然・・・。

8階の部屋は玄関にひび割れ、部屋の中は食器棚からテレビ、本棚まで、事務所同様にメチャメチャな状態。幸いにも愛犬は無事で、部屋のものには一切触れず、愛犬を連れてすぐに事務所に戻りました。

その後は事務所で3日間過ごすことに・・・。

もし一日前に戻れたなら・・・。

間違いなく、家電、家具などの壁止め、ストッパーなどの転倒落下防止対策を施し、そして、保存食の在庫状況をチェックしていたでしょう。

災害時用ではなく、たまたま直前に買い込んでいたからこそ保存食に余裕があり、それが結果的に功を奏しただけ・・・。

災害時を想定し、備えるということは何もしていなかったことに初めて気付かされた今回の震災でした。